

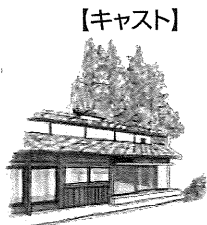
真夜中のサーカス

1.

《魔術》

港にある旅館に、東京からのお客が訪れている。女中とのたわいもない会話がすすみ食事も終わる。頼んだマッサージ師が来て、揉んでもらうが、具合が悪そうなので、早めに帰して、番頭を呼んだ。

ところが、番頭の口から衝撃の真実が……。



【キャスト】 客…………… 加藤 健太郎
女中…………… 外館 暢子
マッサージをする女… 沼山 華子
番頭…………… 出貝 綸規

2.

《寸劇》

奥深い山の畑を捨てて、この港町に下りてきた作造と伸子と母親。なかなかうまくいかない町での生活。作造は交通事故で大怪我が負う。痴呆の進んだ母親が行方不明に。中学校を卒業して温泉宿で中居をしている作造の姉一枝も心配して来ている。

作造は思いがけないことを語り始める……。

【キャスト】 作造…………… 木下 勝貴
伸子…………… 橋本 住織
一枝…………… 柏井 容子
女(声)…………… 江刺家 佐智子
婆ちゃん…………… 江刺家 佐智子

3.

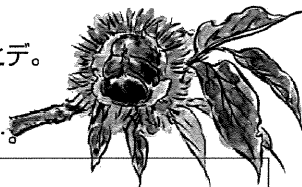
《赤い衣装》

病身の母親と18歳の妹ヒデを山奥の村に残して、仕送りのためにこの港町で働いている21歳の良作。ある日、母の看病で大変な妹を心配して、港町に呼んで、楽しい時間を過ごした2人。

はちきれんばかりの笑顔のヒデ。

ヒデは楽しそうに

戻っていった……。



【キャスト】 良作…………… 石橋 雄磨
ヒデ…………… 橋口 花歩
女子職員…………… 外館 暢子
男(声)…………… 木村 勝一
与五…………… 榎谷 伸夫

【解説】

榎谷 伸夫

昭和48年発行の短編集『真夜中のサーカス』。サーカス。愉快的イメージがふくらむ。14編の短編は「木戸が開く前に」「綱渡り」「パレード」「魔術」「寸劇」「パントマイム」「スポットライト」「檻」「空中ブランコ」「ジンの嘆き」「鞭の音」「赤い衣装」「小人の曲芸」「火の輪ぐり」。どれも、サーカス小屋での楽しそうな演目を彷彿させる。読み始めたとき、そんな想いは見事に吹っ飛んだ。どれもこれもが、暗くて哀しいのだ。舞台は北辺のさびれた港町奈穂里。表題と内容の大きな落差。この短編集は、作家：三浦哲郎の心の原点の1つではないかと思った。

山本周五郎の『季節のない街』を想起させる。そう、黒澤 明監督の『どですかでん』だ。演出：三浦哲郎氏の「ぼくたちのどですかでん、を創りましょうよ」の言葉に励まされ、「魔術」「寸劇」「赤い衣装」を脚本化した。他の短編のイメージも少し取り込んだ。

社会の底辺で必死に生きる人々の姿。

なお、現代にそぐわない表現があるが、作家の想いを大切にして、そのまま使わせていただいている。

【スタッフ】

演出…………… 三浦 哲郎
舞台美術…………… 木村 勝一
映像…………… 小寺 等之
音響・照明…………… アート&コミュニティ舞台技術部



【あらすじ】

ここは北辺のさびれた港町

早朝、見かけない犬が歩いている
新聞配達少年がからかっている

昼、老婆のパレードが始まると
それをからかう男が出てくる

【キャスト】

犬…………… 小寺 彩音
パレードをする老婆…………… 柏木 七穂
老婆をからかう男…………… 三浦 哲郎